

説教 「星に導かれる旅」 山本 護 牧師
聖書 ミカ書5：1～3／マタイによる福音書2：1～12

「イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった(マタイ2:1)」。神の御子が生まれたというのに、あまりにあっさりした記述。しかし東方の占星術学者のふるまいは綿密に書かれている。

「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた(2:11)」。筆の濃度がこれほどにも違う。神の子の誕生に歓声をあげることよりも、静かに深く「ひれ伏して幼子を拝む(2:11)」ことが重要なのだろう。

誕生したイエスを拝したのは誰か。ユダヤの民ではない、東方の、異教の学者たちだ(2:1)。ユダヤ人は異邦人を「穢れて救われない民」と考えていたが、その異教の徒に神の御子が見出された。あたかも教会が、異端として排斥する人々から、キリストの真実を教え諭されるようなものだ。

「東方で見た星が先だつて進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった(2:9)」。この感覚、素朴に、直感で分かる。

私が年少の頃、遊んでいた公園に夕刻が近づくと、時折Oという狂女が自転車でやって来た。子供たちは優しいOが好きで、馬鹿にしたりからかっていると、空は群青色になり一番星が輝いた。Oは星を指さして呪文めいた声を発し、皆も一緒に空を見上げて不思議な思いにひたつた。

誰でも心の古層には「星に導かれる」共通の感覚があるのだろう。救い主の降誕を告げる一つの星は、民族や思想や信仰の壁をなんなく超えて、遙か東方から異教徒を導き、救いの出来事を啓かせた。

星の周囲は暗い夜空。星が示す救いを聞くと「ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった(2:3)」。王も民衆も「暗い夜空」であった。

つまりこういうことだ。王は占星術学者に「見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう(2:8)」と言いながら、本心は救い主を殺害するつもりだった(2:13)。これはまさに十字架の場面、ローマ兵がイエスの前にひざまずき「[ユダヤ人の王、万歳]と言って、侮辱した(27:29)」のと同じ拝み方ではないか。

この暗い礼拝は、王の姿勢であり(2:8)、預言の意味を受け取りながら殺害を幫助する、信仰の権威者(2:4~6)の墮落した信仰であった。

世は暗い。だが一つの星が輝き、それを目当てに旅をする者がいる。彼らは聖書(旧約)によって生きる民ではなく、異教の占星術師であったが(イザ2:6)、信仰の枠を超えて救い主を見出す。

その家に、幼子イエスは母マリアと共にいて、「彼らはひれ伏して幼子を拝んだ(マタイ2:11)」。そして、自分にとって一番大事なものを献げた(2:11)。

研究者によれば「黄金、乳香、没薬(2:11)」は、占星術学者に不可欠な祭具だそう。真実の救いを前にして彼らはそれを手放し、何もない自分としてひれ伏し拝んだ。

暗い夜、混沌とした地上で、私たちも微かな光に導かれて足元のクリスマスに出会うであろう。そこで私たちは、あの異教徒のように、何もない自分としてひれ伏し拝む。

するとどうなるか。これまで私を縛っていた様々な力が、何もないことに気づくだろう。地位や名誉に留まらず、価値観や願望だって、クリスマスを前にして色褪せる。そして、真実の救いに与る自由と喜びを胸に納めて、「自分自身に帰って行く(2:12)」。夜が一番暗い時期にそれを経験する、私たちキリスト者の旅である。



《おまけのひとこと》

星を見上げて歩きまわり 躓いて怪我をしたギリシア哲学の祖 一度や二度のことではない その馬鹿さ加減を皆が憧憬している そうなのだ 降誕も十字架も その馬鹿さ加減が人を深く打つ